

平凡の中に不思議な魅力

『豊後毛利高政』 立志編・戦雲編

御手洗 一 而 著

この文は大分合同新聞の書評欄（五九・二・二七）の「今週の本」に記載された全文です。なお『豊後毛利高政』は日本図書館協会選定図書になりました。会員の方々の御一読をおすすめ致します。

豊後佐伯藩の開祖毛利高政の生涯を描いた小説。小説といっても史実を忠実に押さえており、激動の時代背景の中に律義に生きた一人の武将像が興味深くつづられている。

著者は昭和二年佐伯市の生まれ、現在川越市在住。ライフワークとして豊後御手洗一族を調べているうち（その一部は『巴の鏡』として出版）「一人の変な人物」に

出会って横道にそれたという。その人物が毛利高政というわけ

毛利高政は少年のころから豊臣秀吉の近習として仕えた。秀吉にかわいがられ、秀吉の庶子説もあるほど。著者は高政の母が秀吉の幼なじみという設定にして庶子説はとらない。

秀吉の近習仲間には加藤清正、福島正則、石田三成ら個性豊かな人材がいた。武勇に優れた加藤、福島、能吏の石田とそれぞれいち早く出世するが、そんな中であって毛利高政はいま一つさえない。しかし、ひとのいい性格からみんなに頼られ、人気があった。もちろん秀吉も毛利高政を縁の下の力持ち的存在として重宝にした。



例えば本能寺の変の時、高松城を攻めていた秀吉は、毛利方と急ぎ和ぼくするため人質の交換をしたが、これに選ばれたのが高政である。これがきっかけとなって高政はそれまでの「森」姓を「毛利」姓にかえたのである。高政は秀吉の側近く仕え、秀吉に多くを学んだ。高政が城持ちの大名にとりたてられたのは近習の同僚の中で

が一番遅い。文禄の朝鮮役後、豊後を没収された大友氏のあとに、日田二万石を与えられたのが最初。そして秀吉の没後の関ヶ原戦では、高政は西軍（石田三成

方）についたが、友人の藤堂高虎らのとりなしで徳川家康から一命を助けられて佐伯藩二万石へ移されたのである。これも高政の人徳のおかげといってよい。以後、毛利家は明治まで続いたが、秀吉近習で生きのびたのは毛利氏だけだった。

「高政のはがゆいほどの人のよさと律義さは、親譲りの性格からくるものであるが、食うか食われるかの戦国時代に、よく自分の道を歩き通せたと私は思う。他に先んずる強引さもなければ、策士的な政治力もない高政が、平凡に自分の道を進みながら、存在感を維持する力に、私はむしろ非凡なものを感じる」と著者は書いている。そこに不思議な魅力を感じるのは著者だけではないだろう。

（人物往来社刊、各二〇〇〇円、立志編二九一ページ、戦雲編三〇五ページ）

佐伯史談会でも取次中、事務局か編集部へ。